

今此の公園内なる蓮池レンチの地なる馬場跡の往來脇に即ち堀ありて、蓮を殖えたり。此の蓮は近年殖えたるものにて、往古よりの蓮池にあらず。蓮池の古跡を殘さんが爲めに、近く殖えけるなり。又此の蓮池と呼び來れる地は、今大瀧と呼べる瀑水の並びなる松林より、百間堀往來との間なる地をいへり。三州志來因概覽附録に、蓮池境内は、城壕の方今東端より西端まで總て百七十二間、學校の方東端より西端まで總て百九十四間三尺、新坂柵門の方六十間二尺、御物見所の方纔に八間二尺あり。といへり。今按ずるに、右學校は、寛政四年に創立せし舊藩の學校にて、今いふ學校の事にあらず。右學校の舊地は、蓮池の後地にて、そのかみ蓮池の地と學校の地との間に往來ありしを、文政三年竹澤殿造營に付、往來を廢し、蓮池の地と合併し、且藩士の第地なども、皆轉地を命ぜられ、今の如く一區内の露地とは成りたり。

○蓮池馬場

舊藩中は、蓮池馬場レンチババと稱し、藩公の調馬所也。三州志來因概覽附録に云ふ。蓮池馬場、長さ六十七間三尺、幅四間、

土居高さ四尺或は五尺三寸、貞享三年八月十五日、幕府より恩賜の駿馬を、蓮池亭にて老臣に見せしめらるゝ事年表に見ゆれば、其の頃既に蓮池馬場ありたる事知るべし。といへり。平次按ずるに、葛巻昌興自記に、延寶五年四月廿七日、奥小將組之輩於新馬場乘馬御免許之旨被仰出。とあり。右新馬場は即ち蓮池馬場なるべし。然らば此の馬場、延寶の頃命ぜられしと聞ゆ。

○蓮池新道

此の新道は、即ち馬場跡なり。廢藩後まで其の儘にて、明治五年三月兼六園の地邊初めて衆庶男女の來遊を許されしに、其の頃は馬場形土居等尙依然たりしかど、同七年五月兼六園の地を公園となし、人民の遊觀場と定められ、追々諸方に入口を付け、園内に茶店等建築の事を許されたり。故に其の際馬場の地に、茶店を建築せんとの願人多く、追々土居を取毀ち、家屋を建築して茶店を設けし。中にも明治十一年北陸御巡幸の際、競つて數店を建て並べ、遂に家屋連櫓して一町の邸地の如く成りたり。茶店の中にも、高橋初三郎と云ふ者、初めて公園の入口なる角に茶店を建

築し、河北郡柳橋の名産なる團子の出店を開きけるに、遊人競つて買ひ行きける故、一町内の茶店共も亦此の團子を製し、公園内の名産とは成りたり。殊に高橋初三郎が高祖母は、天明元年十一月の生れにて、明治十七年四月百五歳の壽齡を保ちけるとて、壽賀の祝意を表し、十五日より廿日まで遊人に景物を出し團子を商ひけり。折しも櫻花眞盛りなれば、日々群をなしたるも、園内の一奇事なるべし。彼の老婆は、明治十九年一月二十日、百七歳にて没せり。實に蓮池町茶店の開祖といふべし。

○江戸町故跡

此の地は、即ち今茶店の家屋を連櫓せし元馬場の地邊にて、舊藩中蓮池レンチと稱する地内也。三壺記に云ふ。慶長十年七月、利光卿の御簾中、江戸より御入興、御前様御家老として興津内記、御用人として由比民部、矢野所左衛門、矢部覺左衛門、其の外御步行・料理人・下々男共に至るまで、江戸より數百人供奉し來るにより、新丸暨び石川門の外に江戸町とて長屋を建て置かせられ、此の長屋へ入れられたり。平次按ずるに、江戸人をば入れ置きけるにより江戸町

とは呼べるもの也。但し慶長十年七月とするは誤也。村井長明の象賢紀略に、關原の明年九月江戸より姫君金澤へ御入興と見え、家忠日記烈祖成續、武徳大成記等の記録、共に皆慶長六年九月に係けたり。さて三壺記に、寛永八年四月十四日金澤火災、城内本丸の殿閣延焼の餘煙江戸町を燒き拂うて、田井口まで悉く焼失す。と見たり。富田景周の蓮池考に、此の蓮池の地は、天徳夫人御入興以後、江戸町とて、關東より御附の人々の小屋、此所にあり。又年譜に、萬治二年七月、此の地に作事所を建つとあり。此の作事所出來の頃は、最早關東よりの御附人もなく、小屋も取り拂ひ後の故なるべし。たゞ延寶四年に作事所を移轉せられし舊地に座敷を建てさせられ、貞享の頃までも以前の遺名にて、江戸町御亭など、唱へたりといへり。三州志來因概覽附録に云ふ。江戸町とは今の蓮池の地なり。古圖に、新坂口より安房坂の終りまで二百三十間許の間なり。有澤武貞の甲寅圖説に、江戸衆の居たる屋敷跡を江戸町といふ。今の蓮池露地の御亭ある邊とあり。但し御附家老興津内記一人は新丸に居し、御用人以下の人々は江戸町に貸屋